

2025.9.18



地域日本語支援ニュース こだま 第 459 号

ともに生きる

～地域で、日本で、そして世界で～



★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★

【地域日本語支援ニュース 「こだま」】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会（AJALT）発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部：<https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.htm>

---

■ともに生きる：神奈川県より■

日本人ムスリマ（注1）として、サウジアラビアと日本で子育てをされてきた富岡さん。現在は外国につながる生徒の多い高校で日本語授業を担当するほか、外国につながる中学生の学習支援ボランティア、「やさしい日本語」の普及活動、自治会の役職まで多岐にわたる活動をなさっています。その一方で、長年、日本に住むムスリム女性に寄りそい、相談にのってきました。ご自身のこれら貴重な体験をもとに、イスラームの子どもたちの支援者の方々に伝えたいことを2回にわたりご執筆いただきました。今回はその後編にあたり、主に支援する際に理解しておいていただきたい考え方や姿勢についてお伝えいただきました。直接の支援者の方々だけでなく、ぜひ多くの皆さんに読んでいただき、異なる文化の人々と「ともに生きる」社会について考えていただければと思います。

（前編（1）は2025年8月21日発行『こだま』458号）

---

イスラームの子どもたちへの理解と支援(2)

鶴見総合高校・横浜総合高校 非常勤講師（日本語）

富岡 貴子

◆支援する方に伝えたいこと

## 1) まずは知ること

イスラームには色々細かい規定があり、面倒（めんどろ）くさい宗教のように思われるかもしれません。私としても、些末（さまつ）な戒律（かいりつ）について説明することは、本来のイスラームの教えの神髄（しんずい）が伝わらず不本意（ふほんい）ではあります。イスラームを知るには、形式的な戒律（かいりつ）への理解ではなく、教えそのものを理解しなければ、本当の意味でイスラームを知ることには至りません。ムスリムと関わり、支援する方は、イスラームの教えそのものへの理解が必要だと感じます。ムスリムの生活習慣についても、どんな配慮が必要なのか知り、なぜそのような行動をとるのか、問題となっているのは何なのかを知ることが大切だと思います。

日本ではムスリムは数少ないですが、世界を見渡せば、三大宗教の一つで、世界人口の約4分の1が信仰しています。ヨーロッパではイスラームとは長い歴史の中での関わりもあったので、それがどのような教えであるのか、教養として知っている人も多いですが、日本では宗教はタブー視されて学校教育でも触れられないことも多いので、知識として欠けていると思います。グローバル化の社会において、今後、世界とビジネスの場面においても、ムスリムとの関わりは避（さ）けて通れません。相手がどのような信仰を持っているのかは最低限知る必要があると思われます。イスラームだけでなく、キリスト教、ユダヤ教、ヒンドゥー教など、それを信仰する人と関わる方には、信仰するか否（いな）かは別として、相手の宗教について最低限の知識はほしいところです。

## 2) 同化ではなく共生を

「郷（ごう）に入っては郷に従え」という言葉があります。私も今から15年ほど前、ヒジャーブをしていた娘たちの学校を選ぶ際に、耳にした苦い経験があります。「ここは日本です。日本人なのにヒジャーブをする必要があるのですか」「本校は登下校の際も同じ服装、同じ髪形で一体感を大切にしていますので、そのことをご理解の上ご検討ください」「ヒジャーブを奇異（きい）に感じる生徒がいて不快な思いをするのではないかと危惧（きぐ）します」「ヒジャーブは許容できますが、大切なお子様をお預かりする以上、断食（だんじき）は許可できません。本校は国際理解を掲（かか）げていますが、インターナショナルスクールではないので、郷に入っては郷に従えで、

日本では許容できないこともあることをご理解ください」など、私立学校を見学したり、問い合わせたりしたときに言われました。昨今は「多文化共生」の声が高まり、学校においてヒジャーブはほとんど問題となくなりましたが、かつてはなかなか受け入れられない時期がありました。

他の国へ向かう側が「郷に入っては郷に従え」という心構えを持つことはある程度必要だと思いますが、受け入れる側がこのような考えを持って接していると、それは同化を求める姿勢につながる危険性があるのではないかと思います。

支援者の中には、日本の文化や習慣を教える機会があるでしょう。外国人にそれを伝え、理解を促（うなが）すことは日本社会で生活していく上で大切なことだと思います。ですが、その実践（じっせん）を相手に求めてしまうと、時に問題となることもあります。例えば、神社での参拝（さんぱい）のしかたについて紹介することは、教養として知る上で問題とはなりませんが、それを実際に「やってみましょう」と勧（すす）めることは、押しつけであり、相手の信仰を無視した行為、あるいは教えに反する行為につながるため注意が必要です。文化の紹介、あるいは良かれと思ってやっていることが、しばしば問題となることもあるということは理解しておいた方がいいでしょう。

### 3) 寄りそう姿勢

イスラームの子どもの中には、戒律を守ることや親からのプレッシャーと友人とのつきあいの中で葛藤（かっとう）を抱えている子どももいます。また、ムスリムとしてのアイデンティティーと日本人としてのアイデンティティーで悩む子どもも多いです。ヒジャーブをしている女子は外見からの違いもあります。テロ報道の影響もあって、ムスリムの子どもたちがいじめの対象になることもあります。他の子どもたちと行動が違って、疎外（そがい）感や孤独感を感じている子もいます。そういう子どもへのフォローやケアも必要だと思います。その際、気をつけなければならないことは、決してイスラームの教えや実践を否定しないことです。

時々、「イスラームって戒律が厳しくて大変ね。断食しなきゃいけないなんてかわいそうね」「豚肉っておいしいのよ。食わず嫌いしないで、食べてみたら？」という声掛けをする方がいます。悪意は全くなく、自分の価値基準でそう言ったのでしょうが、イスラームの教えに価値を置き、自ら積極的

に実践している子にとって、その言葉は“自分の気持ちはわかってもらえないんだな”と感じてしまいます。ムスリムは大変でもかわいそうでもありません。イスラームの実践を自らの意思で積極的に行う子もいることを忘れてないでいただきたいです。たとえ本人の口から戒律に対する否定的な言葉が出てきても、アッラー（神）そのものを否定しているわけではなく、他人からイスラームを否定されると深く傷つきます。宗教については尊重しつつ、子どもの心に寄りそう姿勢が大切だと感じています。

「自分でもイスラームの戒律は守りたいから守っている。でも友達と一緒にすごしたい」「本当はイスラームの教えを守りたい。でも友達と一緒にいたい。だから、学校ではイスラームの戒律は守らない。でも、戒律を守れない自分に罪の意識を感じる」「他の友だちと同じことをしたい。違うことをして目立ちたくないけど、親からのプレッシャーがあるから戒律を守っている」など、子どもによって複雑な気持ちを抱えていることも心に留めておいていただければと思います。

以上、特にイスラームの子どもたちと関わりのある方、支援者の方に知っておいていただきたいことを書きました。これは子どもに限らず、成人したムスリムとの付き合いでも同じことが言えます。

#### ◆多文化共生について

サウジアラビアで住んでいたコンパウンドには、50ヶ国以上の駐在家族が共に暮らしていました。我が家の周りには、イギリス人、シリア人、トルコ人、インド人、スウェーデン人、アメリカ人、ロシア人等が暮らしており、まさに多文化共生の環境の中で、イベントを通して多くの国の方々と交流し、友達になりました。日本にいた時には知ることのなかった各国の事情や文化を知り、日本の常識が世界の常識ではないことも身をもって体験しました。自分とは違うものの見方、考え方の人々とふれあうことにより、視野が広がり、多角的な見方ができるようになったり、新たな発想が生まれたりします。それはひいては社会を豊かにすることにつながると私は考えています。

今の日本社会の動きについて、私は危惧（きぐ）しています。現在は「多文化共生」を掲げ（かかげ）、多様性に寛容な面のある日本社会ですが、先の参議院選挙の際に一部見られた排外主義のように、今後ますます外国人の数が増えていくと、差別や偏見、外国人排斥（はいせき）の動きがより大き

くなるのではないかと思われます。今は日本ではムスリムは少数派だから受け入れられている部分があるのかもしれませんが。数が増してくると脅威（きょうい）に感じる人が出てくる可能性もあります。脅威に感じると、人は心理的に相手を排除しようとします。少子高齢化が加速する日本は、今後、外国人労働者の力なくして経済活動が回らない社会になります。摩擦（まさつ）や分断ではなく、日本人と外国人が共に手をたずさえて、この日本社会を築いていく時代を実現すべく、多文化共生の流れを継続し、より発展していくためにはどうしたらよいかを考えていく必要があります。まずは身近なところで関わりのある相手について知り、コミュニケーションをとっていくことが最初の一歩につながると考えています。

22年前、こんなことがありました。今住んでいる場所に引っ越してきたばかりの時のことです。ヒジャーブ姿で子どもたちと近所を歩いていたら、自転車に乗った数人の小学生から「イラク人！ここは日本です。イラクに帰れ！」と通りすがりに言われました。びっくりしました。小学生がそんなことを言うなんて。ちょうどアメリカ同時多発テロ事件（9.11事件）の後で、イスラームとテロが結び付けられて報道され、アメリカがイラクへの攻撃を始める時期でした。私はその小学生の親がムスリムに対する偏見（へんけん）を持っているのだろうなと感じました。大人が偏見を持っていると、子どもにも伝わります。その時、私はムスリムである私たちの存在を地域の方々に知ってもらふ必要があると感じました。まずは存在を知ってもらい、一人の人間として付き合い、コミュニケーションをとっていくことで、徐々に偏見や差別も消えていくといいなと思いました。そして、近所の人には自分から積極的に挨拶（あいさつ）をするようにしました。

その後、子どもの学校のPTAに関わり、順番で自治会の班長をしたことがきっかけで、そのまま役員にスカウトされて、以来ずっと私は自治会役員として活動に関わっています。地域でのイベントや防災訓練などを通して、人と人との顔の見えるつながり、共助（きょうじょ）の大切さを実感しています。かれこれ15年ぐらいになりますが、その間、子ども会会長、PTA会長を経験し、現在は自治会の広報部長として、毎月、各班の班長宅に広報紙や回覧物を届け、青少年指導員、明るい選挙推進委員の活動もしています。ふだん、私自身は聞かれない限り、自分からイスラームについて話すことはないのですが、ヒジャーブ姿で活動しているので、地域の中にムスリムである私が存在していることは周知されていますし、一緒に活動する中で、自然とイスラームについて知ってもらえるようになりました。

このような経験から、「多文化共生」も身近なところでの人と人とのつながり、地域とのつながりから広がっていくのではないかと考えるようになった次第です。地域の中で、イベントを通して日本人と外国人が互いに知り合い、共に交流する機会が増えていくことを願っています。

注1 「ムスリマ」：女性のイスラム教徒を指す言葉。「ムスリム」は男性のイスラム教徒、および、イスラム教徒全般を表す総称

---